

《シンポジウム》

司会コーディネータ 樋笠勝士

企画の趣旨

一般的に言って思想の影響を語ることは容易なことではない。とりわけ西洋中世思想におけるストア派の影響を語ることは一層困難である。それは、初期ストア派のテキストが断片であり、学派と見なされる活動が長期間に亘り、また学派内の相互関係や各論述が極めて多様性に富むゆえに、一様にはいかないからだけではない。ストア派の倫理学の実質が、キリスト教倫理思想と特に協和的な関係をもつからでもある。だからこそ中世思想の研究においてストア派の影響やストア派と共有する視点の存在を探ることは必須なのである。かつてストア派と教父の比較研究をしていた M. le Doyen Spanneut への献呈論文集 (*Valeurs dans le Stoïcisme*) では、G. Verbeke をはじめ多くの研究者がストア派と教父との間の親和的關係を論じていたが、最近では、古代哲学研究者 R. Sorabji が、中世キリスト教思想にまで拡大してストア派を論じている (*Emotion and Peace of Mind*) など倫理学的研究は新たな展開を見せている。実際、ストア派の倫理学の重要性は、哲学の三分野 (自然学・ことばの学・倫理学) の中で倫理学が「肉」や「果実」の如き目的性をもち (*DL. VII, 40*)、また「徳」が三分野の基礎となる (*SVF, II, 35*) ことから明らかであろう。この古代的知性を教父たちは学び、その実質を意識的に無意識的に共感しつつ導入し、時には同化し、教父思想を作り上げた。さらにそれが中世に流入し、アリストテレスの (偏差的) 影響下にあったストア派が、半ば教父思想の姿をとって、トマスにおいてアリストテレスと再会することになる。そこではどのような「ストア派的精神」が見えてくるのであろうか。このような問題意識の下に、シンポジウム企画チーム (小川量子、松根伸治、樋笠勝士) は2年連続企画を提案し、2009年度は東西教父思想及びスコラ哲学前夜の課題、2010年度はトマス哲学の課題 (序説; 松根伸治, 提題: 桑原直己, 加藤和哉, 藤本温, シンポジウム運動特別報告; 小川量子) を担うこ

ととなった。

2009年度シンポジウム及び特別報告について

2009年度のシンポジウムの構成は、司会コーディネータ：樋笠勝士、序説：故中川純男、提題：土橋茂樹、荻野弘之、山崎裕子、特定質問：水落健治、神崎繁の構成で、またシンポジウム連動特別報告は樋笠勝士が担当した。提題者には企画チームから、ギリシャ教父（土橋）、ラテン教父（荻野）、スコラ哲学前夜（山崎）という課題が与えられた。

始めに、故中川純男により「中世哲学とストア派倫理学」のテーマで序説があり、doxographia の概念を通じて、内容本位でストア派と判明するストア派倫理思想の特徴の説明があった。ここから、断片的な資料であっても中世哲学に「ストア派的精神」が伝播する道筋が明白にされた。この全体像の序説の後、最初の提題者、土橋茂樹はバシレイオス『慰めの手紙』における、パトスの共有とパトスからの解放という対立する概念について、バシレイオスのパトスの三区分をポセイドニオスの区分と対照させることで、バシレイオス固有のアパテイア概念を析出した。そこから、『慰めの手紙』における悲しみの癒しは、修道士の理想としてのアパテイアと両立可能であることが明らかにされた。続く荻野弘之の提題では、アウグスティヌスの回心の場での「ロマ書」の「悪徳表」におけるストア派やパウロの影響、『セネカとパウロの往復書簡』におけるストア派と教父との間の親近性と文体的魅力の背景などストア派をめぐる文化環境を示しつつ、キケロとアンブロシウスの『義務論』の比較考察によって、キケロにおけるストア派的自然主義をアンブロシウスがキリスト教的理念に改鑄する点を解明した。最後に山崎裕子は、影響を論じる方法論的困難の中、ストア派の *orthos logos* の概念とアンセルムスの *rectitudo* の概念の比較考察を試みる。『真理論』に基づきつつ、アンセルムスの *rectitudo* が *debitum* と関わるのに対して、ストア派の *orthos logos* がアンセルムスの *regula* 概念に近似していることを示した。これら提題に対し、特定質問の水落健治はキリスト教がストア派倫理学を受容する視点を、ユスティヌスのストア派批判において提示し、また神崎繁は、古代末期から中世にかけての「ストア派」の影響を系列的に示し、古代中世を貫徹するストア派的言説の浸透伝播の分布図を提供した。以上の提題等に対して、アンケート形式の質疑では、アンセルムスにおけるパトスやロゴスの位置づけ、徳の合一の理論、バシレイオスにおけるアパテイアの両義性等の質問があっ

た。また通常のフロアからの質問では、谷隆一郎はロゴス・キリストの道について、松崎一平は「泣く」の問題について、片山寛はロゴス・キリスト論について、桑原直己はアパテイアの涙について、それぞれ有益な質問があったことを記しておく。また課題として連続させた特別報告では、樋笠が「神の摂理」論を中心に東西教父とストア派との間の親和性について発表した。

(故中川純男先生には、病魔と闘う中、逝去される直前に序説原稿を仕上げてくださいました。心よりご冥福をお祈りいたします。)

〈序 説〉

中世哲学とストア派倫理学

中 川 純 男

われわれが初期ストア派について考えようとするとき、資料となるのはディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』、ストバイオス『抜粋集』、キケロの哲学的著作が主であり、これにプルタルコス、ガレノスが加わる。これらの資料の証言は、多くの共通性を有している。このことに注目したのはドイツの文献学者 Hermann Diels (1848-1922) である。19 世紀から 20 世紀にかけてドイツ文献学の黄金時代ともいえる時期に出版された一冊の本が、古代哲学史研究に画期的な一歩を記した。*Doxographi Graeci* (1879) と題されたこの書で、Diels は、doxographia すなわち学説誌という概念を導入した。Diels によれば学説誌の伝統は、アリストテレスの弟子テオプラストスに遡る。テオプラストスの哲学史は部分的にしか伝わらないが、この書が原型となって後にエピクロス派やストア派についての記述を追加した哲学史が書かれた。このように Diels は推測する。古代ギリシア哲学史はいずれもこの哲学史を共通の源泉として